

# Kachru/Smith によるエートス ~ World Englishes の inclusivity<sup>1</sup> ~

: 日本の英語カリキュラム  
exonormative 外基準<sup>2</sup> endonormative 内基準<sup>3</sup> 議論の帰結の試み

ジェームス F. ダンジェロ

翻訳：田中富士美  
(金沢星陵大学)

アブストラクト： The world Englishes paradigm has gained increasing acceptance since first conceptualized in 1985, but recognition of Expanding Circle varieties has been much less forthcoming, often stigmatized as 'performance' or learner varieties. In this paper I argue for the value and applicability of the Kachruvian 'Ethos' (Bolton '95), regardless of the debate over the existence (or lack of existence) of a codifiable variety of English in a context such as Japan. The paper presents arguments on both sides of the 'inclusivity' debate, arguing that those with a more inclusive outlook are more in tune with the sense of fellowship and shared ownership promulgated by Kachru and Smith in their original vision of the WEs construct. The English version of this paper appeared in volume 13 of this Journal.

キーワード： World Englishes, Expanding Circle, Inclusivity, Curriculum, Japan

## はじめに

World Englishes (いわゆる世界諸英語) は 1980 年代半ばに概念化されて以来、受容の高まりをみせてきたが、「拡大円」 Expanding Circle<sup>4</sup>の英語の認識に関してはそれほど

- 
- 1 inclusivity 包摂性 包含性、多様性を尊重すること
  - 2 exonormative 米英の英語使用基準に従った「外基準」
  - 3 endonormative 注釈 3 における外円に属する国が自前の英語使用基準をもつ「内基準」
  - 4 Kachru の Three Circles (3 つの同心円) のうちの一番外側にある Expanding Circle (拡大円)。英語の広まりを Inner Circle (内円) 主に英語母語話者の国々、Outer Circle (外円) インド、シンガポール、フィリピンなど多言語環境下で英語が第二言語として機能している国々、Expanding Circle (拡大円) 英語が公用語ではないが重要な習得言語である国々に分類したもの。(Kachru, 1992)

どの結果をみせておらず、むしろ運用変種或いは学習者による変種であるとの消極的な認識がなされていることが多い。この論文では二ホン英語<sup>5</sup>がどれくらい地位を確立しているか否かというような議論はある程度まで避け、どの「拡大円」にある英語変種も「正系」地位であることが当然とされなくてはならないということ、Kachru, Smithら学識者による人間中心主義の観点を考慮して議論したい。この観点は単純に‘politically correct’（政治的・道徳的に正しい）というものではなく、現在、英語が世界においてどのように使用されているのか、明らかになっている「社会言語学的現実」（Sridhar 2008）を論証するものである。Braj Kachru/Larry. E. Smithによるエートス（思想的基盤）（以後、Kachru/Smithのエートスと記述）における重要語は pluralism（多元的共存）或いは pluricentricity（複中心性）、フェローシップ、inclusivity（包摂性）、（英語の）所有権（Bolton 2005, Van Horn 2006, Davis 2010）である。この論文の主要部分は inclusivity（包摂性）をとりまく議論を、寛容の低い傾向にある見解をもつ識者の意見と対比しながら紹介したい。そして World Englishes の概念が、英語学習カリキュラムと言語学習現場において、「拡大円」の英語使用者のニーズに大いに応えられる、いわゆる「内基準」のアプローチを提供できることを明示したい。後半部分を通しては、日本での具体例と大学でのケーススタディを論じる。

### 理論構成

拙著（D'Angelo 2010）において論じているが、Sridhar が提示し続けているように World Englishes の明らかな価値と現実的な見解が、第二言語習得の主流理論に反映されることが重要である。そうしてようやく大多数の言語教育の実践者に届き、世界の英語学習者に有益な影響をあたえることになるのである。よく引用されるが、これほどよく言い表したものはない。本名、竹下（1998）によれば日本のネイティブスピーカーの英語への依存から、「拡大円」の国々におけるネイティブスピーカーの英語に基づく英語教育の継続が潜在的に有害な影響を及ぼしていることが見えるという：

日本の英米崇拜の英語教育プログラムは日本の英語教師と生徒にアメリカ英語の概念を植え付けてきた。日本の教師と生徒は大変な学習労力の賜物である二ホン英語をネイティブスピーカーの英語とは違うという理由で軽んじている。この傾向は教師たちをフラストレーションと敗北感の犠牲者にする。それゆえ、自信喪失から、教師の多くが実践的なコミュニケーションよりも言語理論に興味を持っていくのである。（p. 117）

この論文では Kachru, Sridhar & Sridhar, Mufwene, Bolton, 松田、日野、Berns, K.

---

5 日本英語 = Japanese English

Brown., Alatis, Smith, Rafiqzad の見解により筆者の論点を確証していきたい。これらの識者にははっきりとした共通のテーマがあり — 英語変種、所有権/inclusivity (包摂性)、bilingualism (二言語主義)/multilingualism (多言語主義)、「英語の広まり」の賛成派であることだ。最後の「英語の広まり」については、そのような観点を持つ場合、汎用コミュニケーション手段としての英語の重要性の高まりを明確に理解しているということであり、必ずしも「地球語としての英語」English as a Global Language<sup>6</sup>の支持者とは限らないということを強調しておきたい。Mufwene と Kachru の 2004 年の対話において、Kachru が「世界諸英語論は英語が地球語となることとは連動していない」と述べている。この点については、Phillipson や Pennycook の英語ヘゲモニー/帝国主義への危惧における見解に同調する人々のおそれを軽減するのではないかと考える。

多くは World Englishes と言えば Kachru という傾向を示すのではないかと思うが、2005 年の筆者と Thumboo の対話で、Thumboo は「そこに Smith の考えを取り入れるべきだ」と述べている。

そのとおりに、国際共通語としての英語 English as a Lingua Franca (ELF), 国際語としての英語 (EIL) English as an International Language (Sharifian 2008) への注目の高まりは「拡大円」の国々の勢力と両立するものである。Smith の研究はこのエリアにおいて重要で影響力が強い。ネイティブスピーカーの英語のモデルが現実と一致しない具体的な考察を述べている。

タイ人は ASEAN の会議においてフィリピン人と話す際にアメリカ人のように英語を話す必要はない。日本人がマレーシア人とビジネスの打ち合わせをする際にイギリスの生活様式を取り入れる必要はない。中国人が世界市場向けの出版をする際に必要な英語使用のために西洋文学の知識は必要ない。フランスとドイツの政治指導者は私的な政治対話の際に英語を話す、それはアメリカの政治姿勢を取り入れているわけではない。これらの状況において英語使用者はネイティブスピーカーのように話そうとしているわけではないのである。(Smith, 1983)

言語カリキュラムへの「内基準」導入賛成派の見解に更に進む前に、数年前 Brown によってまとめられた言語カリキュラム開発の重要な概略モデルに触れたい (Figure 1)。シンプルで解り易くとてもよくまとまったモデルである。このプロセスの非常に重要な「反復性」といづれの段階においても評価の必要性を強調している。学習内容がプロセスにフィードバックされることを目指す継続的英語力向上を背景とする日本のカリキュラムのようである。

然しながら、ひとつだけ不足している要素があり、それはプロセスのスタート部分を

---

6 Crystal, D. 1997

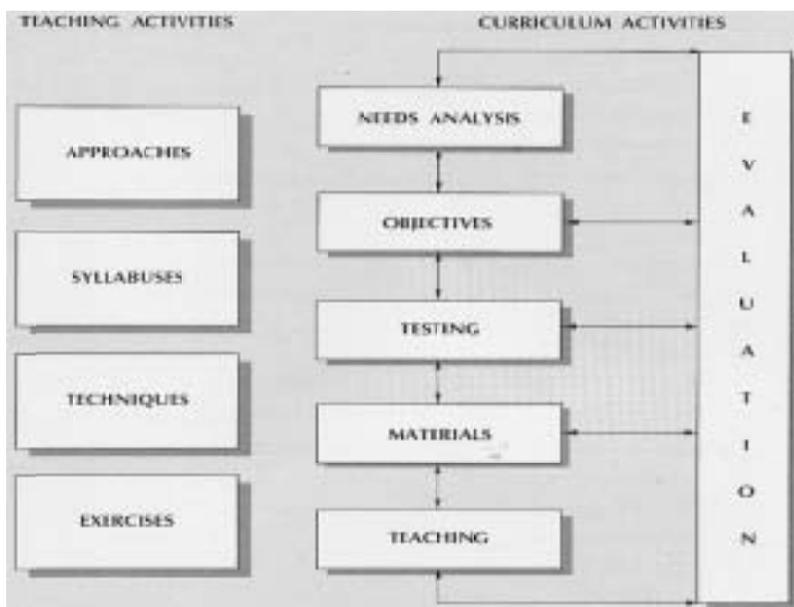


Figure 1 : Interface of Teaching and Curriculum Activities  
(Brown, J.D. 1995, p. 29)

担う needs analysis ニーズ分析を実行する際に不可欠なものである。それは — かつてボブ・ディランの歌の歌詞にあるように — wants と needs である。生徒はその違いを果たして知っているであろうか。日本人や他の「拡大円」の生徒は今も尚、キャメロン・ディアスやレオナルド・ディカプリオのようなネイティブスピーカーの対話者を思い描き、アメリカやイギリスに行きたいと思っているともいえるが、日本の政府のデータでは日本人は旧来のネイティブスピーカーと話すという環境よりも、アジアの国々やアフリカ、中東での英語使用をする傾向がより強いとされている。(Kachru, Y. 2003) そしてその傾向はさらに強まっている。日本の中学校や高校関係者には浸透されていない事象と見受けられるが、それゆえ生徒よりも教育者、政府がニーズ分析に長けていく必要がある。

### 対する見解

Inclusive (包摂) 論をとらない識者は、「内基準」モデルと「内基準」英語教育プログラムが、定着した英語の地域変種を体系化することを強く主張する — 「内基準」の考えが「内円」もしくは「外円」の国々にのみ適応するという考えを超えて進むことに困難を示す傾向がある。そのような識者は概して応用言語学や教育に消極的である。それを示すように 2007 年に矢野安剛先生がある学会の国際大会において、世界的な新種の英語形成における ICE (国際英語コーパス) コーパス関連の発表者へ言語教育との関連について問いかけた際、そこにいた聴衆の一人は(「外円」の英語のみを研究して

いる研究者) 氏の質問の主題への関連性が把握できない様子であった。

筆者のカリキュラム研究では、新種の英語変種をどの程度認めるといったことは優先事項ではなくむしろ不必要といっても過言ではない。カリキュラム開発における世界諸英語論の価値はそのような議論からの独立性をもっていることで、厳然と体系化し得る地域変種と結び付けられることが必須条件というものではない。

この脈流上もっとも際立った最近の論争は、おそらく Schell による新しい概念 Colingualism (相互言語主義、コーリンガリズム) に関する論文と続いて起こった議論によるものであろう。2008 年の World Englishes 上においてみられる。Schell によれば、

日本人が相対して、いわゆる彼らの英語変種である二ホン英語を話しているのなど聞いたことがない……私は、ある言語を共に話す話者を表現する colingual (相互言語話者、コーリンガル) という用語を提案したい。日本人がふたりいて、そこにアメリカ人がはいる時 (ノンネイティブスピーカー対ネイティブスピーカー) ふたりは英語のコーリンガルとなる。しかしアメリカ人が抜けてふたりなら (ノンネイティブスピーカー対ノンネイティブスピーカー) そうではない。日本人は日本人以外の人と話すときのみ英語を話す。対照的にシンガポール人は英語のノンネイティブスピーカー間でコーリンガルとして話し、ネイティブスピーカーがいても同様である。故に英語を母語とする国々を規範提供者か規範従属者かに分ける基準とは、つまり同国人が外国人不在で英語を話せるか。ということである……新しい英語変種の出現はスポークンディスコースからであってライティングやインターネットチャットングからではないとするのが妥当であろう。その国の文化遺産を表現するための独自の規範をもつ英語変種を生み出すことは多大な時間を要するプロセスである。言語はとてダイナミックで力強く、その創造が社会のコンセンサスを得るには、それに足るだけの、大多数のコーリンガルによる使用が求められる。(p. 118-120)

明らかに Schell は主として新種の英語をどのように定義するかを述べているが、Kachru/Smith のエートスの主要点である潜在的な感情とアイデンティティへの恩恵については述べていない。然しながら、日本の英語教育において inclusivity (包摂性) の認識、二ホン英語の存在の認知は途上であるといえるのではないだろうか。日本の英語教育界を代表する一人、矢野 (2001) はこのように書いている。

日本の文化と言語を反映した二ホン英語という地域変種が定着し認識され得ることは難しい。しかしながら、日本の言語と社会文化的な特性が日本人の英語話者の英語に浸透することは当然避けられないことである。……尚、インド英語やシンガポール英語と同意で二ホン英語というものを定着させるほど、日本人は集中的に縦横に英語を使用しない。むしろ形式的、規範的な英語といったものであろう。(p. 127)

しかし、矢野 (2004) は、世界諸英語論を支持する立場の一人として、日本の英語教育において複中心性と脱英米化の重要性も次のように強調している。

.....問題はアメリカやイギリスの基準から判断して、外国訛りのインド英語やシンガポール英語、そして日本人らしい英語を蔑み、アメリカやイギリスらしからぬ言語活動を蔑んだり非難する態度がうまれることである。それは国際的であることや共生の精神に反し望ましいことではない。(p. 192) .....われわれは自分の使う英語に日本語訛りがあっても卑下することはないのであり、むしろ日本人のアイデンティティと考えることもできる。(p. 193)

矢野は日本人の英語への態度と実際の英語使用の現実により接触し、他の識者<sup>7</sup>よりも近い位置にあるが故、コーリンガリズムをテーマとした World Englishes 上 Schell への返答としてこう述べている。

Kachru (2005: ch. 4) は、日本の英語変種を好意的に過大評価している.....日本人の欧米への劣等感と憧憬は福沢諭吉が列強を真似なければならぬと言っただけで 120 年間変わっていないのである。Schell が「日本人は独自の英語変種を発展させるはっきりとした意思はない」としているのは正論である。(矢野 2001, p. 139)<sup>8</sup>

Kachru/Smith によるエートス (思想的基盤) を英語教育に採用することが、まさに日本人の劣等感を逆転させるであろうこと、また必要なのは、恐らく独立した『変種』ではなく、『独立した観点 (英語観)』であると、筆者は考える。Dayag が指摘しているように、日本では試験のため、つまり大学入試の筆記試験に合格するために英語を教えているというのは明らかではあるが、これらの試験は「教養ある英語」'educated English' が元になっておりその重要性は inclusive (包摂性) 寄りのアプローチを採ることと対立するものではない。日本は、過去 20 年間、コミュニカティブ・アプローチにより重点を置いてきてはいるものの、それはネイティブスピーカーの英語をもとにした (NS-*TESOL*-friendly) な英語を教えるものであり、私は、社会言語学的に見て、より現実的な Halliday による機能性アプローチ (Hallidayan functional approach)<sup>9</sup> の方が適切であると主張したい。

---

7 拙著 (2010a, 2010b, 2010c) で Seidlhofer, Kirkpatrick の English as a Lingua Franca への関心の高まり、Sharifian と松田による 'New EIL' (新しい国際語としての英語)、のように「拡大円」の新たな解釈について述べている。矢野先生のような識者の方向性と合致していくのではないだろうか。

8 日本では英語が主に国際語として使用されている。日本人が「独自の変種を発展させる意思はない」と矢野先生が 2001 年に Schell の意見に理解を示していらしたことに同意する。

9 Halliday, M.A.K. による、Systemic Functional Linguistics 選択体系機能言語学によるアプローチ

SchellはBernsの発言に言及し、さらに問う。「行き過ぎたことに、「拡大円」の英語変種を)「内円」や「外円」の英語と同様に有効であるとの概念を人々に植え付けようとするのを……民主的な姿勢として、声高に呼びかけている」と、Bernsをかなりリベラルであるかのように表現している。それに対し、言語変化の段階的な性質を掲げるMufweneはこの議論において、「他方でShellがなぜ『日本人には、独立した種類の英語を開発する意図がない』と読者の関心をそらすのか」と、素早く擁護している。「外円」の国々において英語の現地語化(Indigenization)を図るといのは、混成言語(クレオール)または、現代版「ネイティブ諸英語」の出現と同様に、意図的であるとか計画性のあるプロセスではない(p. 134)。ShellをサポートしNelsonは、批判的に反応する代わりに、読者へのアドバイスとして「World Englishesについて説得力をもって議論するために必要な語彙は増え続けているが、Shellは有益な語彙を追加した点が着目できる」と述べている(p. 135)。

### 更なる支持論

Bernsは、「拡大円」英語変種の英語使用者に、言語的「最先端」であることの権利が受け入れられるときが近づいていると、問題の核心にはいつている(2005, p. 92)。この考えを引き継いで、inclusivity(包摂性)の問題とその教育学的観点から、松田は説得力をもってこう記している。

昔からある画一的な見方ではなく、……国際語としての英語(EIL)のように多元的な見方によると、英語が、それぞれ独自の目的で英語変種を使用している様々な国の人たちに帰属しており、またノンネイティブを含めた多様な英語使用者が、今日の英語を定義づける決定的な役割を果たしている。私は、EILの現実と向き合う中で、そのような見解(英語はネイティブの所有物である)の適切さに疑問を呈する。将来の国際英語を形成するにあたっての貢献と責任について、EIL使用者の認識を高める(必要ある)。(下線強調は筆者による、p. 484)

また、以下のように付け加える：

私は、英語教育を行う上でアメリカ英語を有力なモデルとして選択することは合理的かもしれないと信じてはいるが、はっきりさせておかなければならないのは、それは英語の一つであり、唯一の英語ではないということである。……変種の英語を体験し異なる英語変種に対する認識レベルが高まるにつれ、英語変種に、より前向きな態度を示すようになる。……独自の変種でコミュニケーションを図ることを抑制しなくなるかもしれない。(このことは)また、言語帝国主義と国際コミュニケーションにおいて存在する力の不平等に対して、批判的な認識と抵抗力を高めることの必要条件である。(p. 494)

松田はここで言語帝国主義に触れているが、学界の第一人者であり、さらなる inclusive (包摂) の姿勢を示す学者の一人である Alatis は真の友愛精神を示し、そして Kachru/Smith によるエートスが『啓発された』ネイティブ・スピーカーにとっては問題ではないことを表した。

最初に述べたように、私は、Phillipson の著書 *Linguistic Imperialism* を、最後まで読み切ったことはないのです。というのも、英語を世界中に広げようとする直接的、あるいは間接的な計画があると主張する言語帝国主義の概念は、よく議論され理屈づけられているものの、私から見ると、なんだか誇大妄想的に思えるのです。……英国人とは対照的に、アメリカ人は英語に関する明確な政策を持ったことはなく、……Phillipson その他の人々は、誤って、言語帝国主義の責任をアメリカの英語教育への関与のせいにしてしているのです。もちろんアメリカでは、言語の重要性を認識するまでにとっても長い時間かかってしまったという点で、多くの機関や個人の chauvinism (排他的な愛国主義) の罪は大きいが…… (2004)

日本人の英語使用に関して希望的な姿勢をとる日野によれば「日本的な価値を表現する手段として、革新的な二ホン英語が国際的な場面での使用されることで現地語化 indigenization が図られ、その結果、「拡大円」変種の英語が、独自の英語規範を発展させる可能性を否定できる証拠はない」という。日野は日本の英語をより EIL に近い視点から見ているが、さらに、国際的な場面で多様な英語が出会うという観点をもっている。Smith は、2008 年に中京大学で話をした際、タイトルを次のようにつけた。「ESOL から EIAL、次に EILL、その後 EIL、そして World Englishes へ」、このタイトルは、ある意味、初期の構成概念から世界諸英語 (World Englishes) に発展する進化の過程を表しているが、一方で、Seidlhofer と Jenkins の ELF Voice Corpus や Kirkpatrick の ACE コーパス<sup>10</sup>を通して、EIL が再浮上している。

### 導師 Kachru からの直言

The Other Tongue の論文「Bridging the Paradigm Gap : Second Language Acquisition Theory と Indigenized Varieties of English」の共同執筆者である Sridhar が、『社会言語学的に現実的な見識』と言い表したものについて、Kachru 自身に当たってみるのが最良の方法であろう。(D'Angelo 2008a, p. 99) Kachru の有名な 6 つの誤謬 (2003、2005) は、ネイティブスピーカーを基盤とする英語教育モデルの落とし穴を極めて的確に指摘しており、さらには、ノンネイティブスピーカーを基盤とする英語教育モデルを構築する際の検討項目を示す最良のガイドラインとなっている。本論文の最後で、より具体的に取

---

10 Asian Corpus of English

り上げるため、ここでは短く提示する。

1：ネイティブスピーカー理想化誤謬：

ネイティブ・スピーカー（通常、中流階級の白人のアメリカ人）が、正しい英語を使う唯一の専門家である。

2：ネイティブスピーカー対ノンネイティブスピーカー間対話についての誤謬：

大部分の「拡大円」英語話者は、理想化されたネイティブスピーカーとではなく、実際には他の「外円」及び「拡大円」の者と対話を行う機会を持つほうが多いであろうという社会言語学的現実を認めない。

3：文化アイデンティティ（または単一文化）誤謬：

英語は英米の文化と密接に結びついており、故に英語を学ぶ上で、英米の文化を学習することは不可欠である。

4：外基準誤謬：

『正しさ』のモデルは、Inner Circle の英語にあるとして、二ホン英語や他の「拡大円」変種が、それぞれローカルの文脈の中で英語を適合させる過程の豊かな創造力を否定する。

5：中間言語誤謬：

Inner Circle でない英語は欠陥があるか、基準に達していない英語であり、ネイティブ英語のレベルより劣っていると見る。

6：カサンドラ誤謬：

英語の『パルカン化（小国分割）』が現在のように世界に広がる結果として、英語の破滅が差し迫っている。

Kachru は著書「Asian Englishes」の要素のひとつとして、日本の例を時間をかけ慎重に調査し、「日本の ELT において、6 つの誤謬を英語教育制度に組み込ませた原因となった主要なイデオロギーであり教育学的概念が、津田（1992）が論点をよくまとめ、『英会話（イデオロギー）』と称したものである」と問題を的確に指摘している。英会話は、主に海外旅行で使うためのもので、日本人は、Integrative motivation（統合的動機づけ）と特徴付けられるように、ネイティブスピーカーである米英の文化や人について意欲的に学びたがっているという、完全にネイティブスピーカーを基盤とした「外基準」的な視点に基づいている。

Bolton の 2005 年の布石となる論文「Where World Englishes Stands」において、Kachruvian Ethos と称した中に、Kachru/Smith によるエートス（思想的基盤）が極めて適切に述懐されている。また、Bolton は、Kachru が革新的に見えるかもしれないが、穏健派であることを強調している。「当該分野の大多数の著作が、かつては政治信条的に広くリベラルであったが、Phillipson の著作は、マルクス主義から現存理論への妥協のない攻撃であり、Dependency 理論や資本主義を批判する人たちへ訴えるものであつ

た……理由がどうであれ、Phillipson の著作物は、大きな影響力を持って、世界の英語を政治力学的に捉えるその後の議論へと導いていった。」しかし、Bolton は、Phillipson が反 (anti) 英語派という立場をとる一方で、Kachru は英語擁護派 (Pro) であり、バイリンガリズムの果たす大切な役割のおかげで英語を『キラー言語』とはみなしていないことを再確認している。Mufwene が言うように、「マクドナルドは、フランスでは、英語でハンバーガーを売らない！」(D'Angelo, 2004, p. 30)

世界諸英語の理論的枠組みの強さは、かつても、そしてこれからも、その一貫した多元主義と inclusivity (包摂性) にある。この世界諸英語のエートスは、この 20 年間の発展過程においてきわめて重要な意味を持つ。それを核にして、世界諸英語のカギとなる態度や信念の多くが関わっている：言語と人種の多様性に対する支持、希少言語と文化に対する支持、男女平等に対する支持と教育の機会均等に対する支持。学問的に、世界諸英語のエートスはまた、世界中で英語を広がることに関心の高さを反映し、この分野における言語調査の推進や、文献調査、文化研究、教育などの学識的な可能性を反映している。このエートスは、また inclusivity の本質とも関連付けられる。(Bolton 2005, p. 78)

実際に、Bolton は 1985 年 World Englishes の最初の editorial において、inclusive エートスについて確認している World Englishes は、学生、そして言語、文学、英語教授法の研究者や教師のためにあり……、委員会では、英語使用者や国際的な英語教育について議論する際、……すべての英語使用者にとって有益であるよう、ネイティブとノン・ネイティブを対等なパートナーと考える。頭字語 WE は、したがって、相互尊重という原理が根底にあることを適切に象徴するものである。」(p. 78)

Sridhar は、上記に示唆したように、主要な学者の一人である。Sridhar は、伝統的な SLA 理論の時代遅れの性質を概説し、世界諸英語が英語教育のよりよい方法を提供できるかを見せることができる最適の人物である。彼は、具体的なレッスン・プランの変更を実施するための特定の技術までは至らないものの、そのような変更に対しての強力な支援として活用できる。2008 年、筆者はかつて直感的に正しさを感じていた彼の代表的な論文「Bridging the Paradigm」について、直接聞く機会を持てた。

同じ SLA 概念が使われ続けているが、世界諸英語の観点と、SLA が共存するのがは難しい。ひとつの問題は世界諸英語の文脈の中で SLA についての研究はほとんど皆無であることだ。SLA の研究は、はっきり定義づけされず、継続して研究されることもない「不毛な論争」で占められている。Krashen's Learning 対 Acquisition, the Monitor Model, SLA の習得過程と子供の言語習得過程の比較、Interlanguage などは、世界諸英語に適用することはできない。というのは世界諸英語は他の何かへの移行過程ではないからだ！

伝統的な SLA には大きな制約がある。SL は、ネイティブの環境で、ネイティブの会話者と学ぶものであり、単一言語環境の中で理想化されたネイティブの英語に近づくことで評価さ

れる。学習者を第一に考える視点や他言語の入る余地のない世界である。この前提は、バイリンガルになることが SLA の目標であると理解されていることと矛盾する。SLA は余りに長くにわたって、教師の側からの視点にあるのだ。

さらに Sridhar は続ける。

教育上の傾向としては、規範に則る方向にある。つまり、ネイティブスピーカーをモデルとし、(学習者)の母語への転移を恐れるのだ。母語は価値を認められないで、(英語習得への)干渉原語であるとのレッテルを貼られる。英語以外の言語は、不必要な邪魔者ではなく、言葉の意味をより豊かにする貴重な資源なのだ。.....われわれは、言葉のレパートリーの中に突っ込んでいかなければならない。単一言語の観点では、「純粋な形」を好み、意味が混合することを恐れる。しかし、もし、話者と聞き手が、同じバイリンガルとすれば、これは追加の資源となるのである。言語はひとつひとつ密閉空間に閉じ込められているわけではない。私たちの意識はそのような小部屋に分かれていない。単一言語主義では、世界諸英語が活用する言語の転移を否定する。バイリンガリズムは Bloomfieldian の「一人が二つの完璧なネイティブ言語をもつこと」ではない。二つの言語はともに部分的であり、お互いに補完し合っている。人々は、言語を使う中で、必要な能力を身に付け、使用することで保持するのである。(D'Angelo, 2008a, p. 99)

バイリンガルにおける第一言語の影響を、干渉ではなく、付加的だと評価する Sridhar に呼応して、Van Rooy は述べている。「世界諸英語の通貨である多様性を恐れる言語学も中にはある。しかし、この多様性は、引き算ではなく、足し算で見なければならぬ。」(Van Rooy, 2008)

### カリキュラムの派生

上記の足し算的言語学習の概念は、当初カナダでの子供のバイリンガル教育について Cummings 他が発展させたものであるが、世界諸英語の影響を受けた英語教授法により、ネイティブ教師が生徒の間違いを正すことに集中せず、学習者の創造性に着目する様子を表す一つの好例である。真のスタンダードとなる唯一の英語などというものは存在せず、使用者も学習者も、当然と思われているすべての前提に立ち向かうことが求められる。政策立案者も、カリキュラム作成者も、教師も生徒も、すべて、次の問いを自問すべきである。D'Angelo (2008b, p. 73) で概説したものであるが、参考までに筆者の仮答も合わせて記しておく。

1. いつ、どこで 日本人は、英語を話すのか？

A : 英語は、観光旅行のためだけでない。ドクターや研究者にとって国際会議で必要

であるし、日本の実業家や交換学生、輸入されたフィリピン人看護師など。英語のクラスでは、現実的に起こりうるシナリオに基づいて英語の使用場面を創るべきである。

2. 誰と 日本人は英語を話すのか？

A：ノン・ネイティブと、あるいは、日産自動車のように、会社の中で日本人同士が。

3. 誰が、日本の学生に英語を教えるべきか？

A：教養のある日本人の英語話者、Outer Circle の教師、そして、「啓発された」バイリンガルの Inner Circle の教師。西洋の学習方法の押し付けではなく、日本人の学習スタイルを活用する。

4. なぜ、日本人は英語を話すか？

A：英米の文化を学ぶためではなく、日本の目的に合う双方向コミュニケーションのため。

5. 英語の『モデル』は、何でなければならないか？

A：おそらく文化的に中立の『学校英語』、学習にとって身近な担任教師の英語、主に日本人の英語がモデル。アメリカ英語の短縮形や、口語表現、音節でタイミングをとった発音、アメリカ人風の思想伝達法、学ぶことに重点をおくことはしない。

6. 何について、英語のクラスで話すのか？

A：日本文化、日本のライフスタイルと社会問題、日本がより密接に関係する ASEAN + 3 問題などの国際な話題。

7. 間違い vs 創造性はどうか対処されるべきか？

A：創造性を探し、受け入れなさい。言葉を活性化するようなポジティブな影響を探しなさい。そのために、たとえネイティブスピーカーでも、教師は日本語を話せるべきであり、「我々は……こういう」をいって絶えず生徒の間違いを訂正することはしない。ELF 研究で共通に見られるような、例えば「staffs」, 「damages」, 「colorful rainy day」のような加算/不可算名詞の区別の誤用などに寛容であること。

8. 英語学習の結果、日本人はどんな英語を話せるようになればいいのか？

A：発音に日本語の影響が混じっていると看做しても、きちんと聞き取れて理解できればよく、また、構文・形態に日本語や、日本人のマナー、礼儀正しさ、遠慮深さなどの影響が入っても、それらは興味深い言語活性化反応であり、間違いではない。日本の文化や日本人の考えを説明できる能力が大切なのである。

勿論、この仮答が個々のクラスの学習にあてはまるものではないが、これらは世界諸英語論に根ざして具体的に呼応しており矛盾するものではない。実際の授業に適應させることも、もうまもなく可能であろう。このことについては新たに提言したい。

## 導入への希望の根拠

いくつかの方法で、この新しい教育論を実践する試みがなされている。川島 (2009) の研究によると、1987 年から文科省 (実施当時は文部省) が始めた JET プログラムはネイティブスピーカーの採用割合が減り、「内円」以外の教師が増え始めた。

データを見ると、アメリカを除いてほとんどの内円諸国からの教師が減り、南アや他の国々が増加している。あいにく、アメリカは全体の 60% に膨れ上がり、一種の二極化が見られる。また、JET プログラムの教師の人数そのものが減少していることも注目される。2002 年の 5676 人から 2008 年は 4288 人に減っている。その理由は、恐らく、多くの外国人教師を招聘することの効果に疑問を持ち始めたこと、そして、日本がもはや第二の経済大国でないことも一因なのかも知れない。ALT は日本人教師とチームティーチングの形で週一回コミュニカティブのクラスを行う。このことが、別の問題をはらんでいる。生徒が ALT を “面白い” 人と考え、ネイティブスピーカーを崇めてしまうことで、外からの英語モデルをより強固なものにしている。逆に、日本人教師の役割をないがしろにし、自信を失わせてしまっている。加えて、ALT はほとんどが大学卒業まもない 22 歳で、英語教育に携わったことも恐らくないと思われ、学生にいわゆる “本物の英語” に触れさせるというために呼ばれたものである。World Englishes の主張と

nationality	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	
USA	570 70.1%	832 80.1%	1,034 54.8%	1,159 54.2%	1,440 53.6%	1,557 50.6%	1,738 49.7%	2,021 52.4%	2,248 53.1%	2,433 53.4%	2,408 50.3%	2,477 49.1%	2,432 48.4%	2,378 43.5%	2,347 42.0%	2,526 44.5%	2,582 45.7%	2,709 48.7%	2,752 51.3%	2,759 54.6%	2,701 57.4%	2,571 60.0%	
UK	149 18.3%	247 17.8%	364 19.3%	389 18.2%	483 18.0%	590 19.2%	684 19.6%	709 18.4%	790 18.7%	872 19.1%	1,013 21.1%	1,097 21.7%	1,128 21.5%	1,253 22.9%	1,325 23.7%	1,233 21.7%	1,165 20.6%	1,021 18.3%	887 16.5%	699 13.8%	555 11.8%	428 10.0%	
Canada		121 8.7%	276 14.6%	350 16.4%	470 17.5%	562 18.3%	630 18.0%	662 17.2%	692 16.4%	725 15.9%	792 16.5%	826 16.4%	858 16.4%	948 17.3%	1,018 18.2%	957 16.9%	942 16.7%	847 15.2%	739 13.8%	655 13.0%	581 12.6%	498 11.6%	
Australia	72 8.9%	131 9.5%	134 7.1%	132 6.2%	128 4.8%	167 5.4%	198 5.7%	217 5.6%	243 5.7%	264 5.8%	280 5.8%	309 6.1%	344 6.6%	352 6.4%	344 6.2%	364 6.4%	368 6.5%	373 6.7%	370 6.9%	340 6.7%	281 6.0%	249 5.8%	
New Zealand	22 2.7%	33 2.4%	42 2.2%	67 3.1%	124 4.6%	159 5.2%	192 5.5%	193 5.0%	194 4.6%	197 4.3%	212 4.4%	243 4.8%	272 5.2%	338 6.2%	345 6.2%	368 6.5%	349 6.2%	323 5.8%	302 5.6%	254 5.0%	228 4.8%	194 4.5%	
Ireland		20 1.4%	36 1.9%	41 1.9%	43 1.6%	41 1.3%	55 1.6%	52 1.3%	63 1.5%	69 1.5%	81 1.7%	80 1.6%	84 1.6%	90 1.6%	88 1.6%	95 1.7%	103 1.8%	122 2.2%	114 2.1%	112 2.2%	93 2.0%	76 1.8%	
South Africa											5 0.1%	12 0.2%	17 0.3%	22 0.4%	33 0.6%	46 0.8%	51 0.9%	62 1.1%	66 1.3%	78 1.5%	94 2.0%	99 2.3%	
other countries														21 0.4%	41 0.7%	68 1.2%	86 1.5%	88 1.6%	109 2.0%	130 2.4%	159 3.1%	160 3.4%	167 3.9%
others*														87	45	15							
Total	814 100%	1,385 100%	1,887 100%	2,139 100%	2,689 100%	3,077 100%	3,498 100%	3,855 100%	4,231 100%	4,561 100%	4,792 100%	5,045 100%	5,241 100%	5,467 100%	5,583 100%	5,676 100%	5,649 100%	5,567 100%	5,362 100%	5,057 100%	4,707 100%	4,288 100%	

other countries mean NNS ALTs (see Group 2 for details)

Figure 2 : Number of Assistant Language Teachers by Nationality  
(Kawashima 2009, p. 41)

は、まったく正反対の主張である。筆者は、この JET プログラムのあり方を考え直す時期に来ているのではないかと考えている。

日本において、World Englishes のアプローチを現実のものとするために、以下の関係者に、教育的また認識を高めるための研修を、マクロ・ミクロのレベルで行うことが不可欠である。

1. 文部科学省
2. 教育機関：初等、中等、高等教育の関係者
3. 教師訓練プログラム、教師自身
4. 個々の授業計画立案者
5. 生徒自身

マクロレベルでは、本名信行先生が文科省の長期教育計画策定委員を務めており、JET で“他の国々”からの招聘が増加したことのひとつの要因かもしれない。本名先生は、JAF AE を創設し、研究者の新たな方向性を導き、さらには「Asian Englishes」を創刊した。そして現在、本名先生は、日本の主要企業の言語監査を行う青山学院大学の HiCon と呼ばれる、新しくも重要なコンサルティング会社の中心人物である。

よりローカルレベルでは、中京大学が境贄三学部長の先見性により、過去 8 年の間に、3 段階で World Englishes を進めることを可能にした。まず 2002 年、国際英語学部 (World Englishes Department) を、そして 2006 年大学院を設立した。大学院で教育を受けた教師の一人が系列の中京大中京高校で今、教師をしている。こうして、高等教育の中に、World Englishes の考え方が確実に取り入れられる。大学院の卒業生も地域の学校で教えており、彼らの声は他の教育施設にも届き、World Englishes への認識を広めることになるだろう。

Kirkpatrick の新たな取り組み ACE (Asian Corpus of English) において、筆者は日本のパートを担当する。日本の研究者たちがこうしたコーパスを作成し、ヨーロッパの外円英語の実情と対比させる取り組みを始めることは、EIL に対する認識、そして日本における Kachru/Smith のエートスの価値に対する認識を高めるであろう。

## まとめ

本当に二ホン英語はあるのかどうかという議論はしばらく続くであろうが、World Englishes を理解し、「内基準」を求める英語教育へのアプローチはやがて日本を初め、他の「拡大円」の国々においても、実施されていくであろう。それにより、Kachru の 6 つの誤謬も修正されていくことになる。このアプローチは、Kachru/Smith エートスの多様性、友愛精神、包摂性に基づくもので、「拡大円」話者のアイデンティティ問題も改善され、「拡大円」話者は、独自の機能的必要性に応じて、英語をより生産的に使う

という目標達成に役立つであろう。このプロセスはすでに始まっており、今後も続くと思われる。なぜなら言語教育は世界における「社会言語的現実」をより密接に反映させるものだからである。

#### 参考文献

- Alatis, J. (1996) "The Universe of English: Imperialism, Chauvinism and Paranoia." in World Englishes 2000, L. Smith and M. Forman, eds., Honolulu: Univ. of Hawaii Press, East West Center.
- Berns, M. (2005) "Expanding on the Expanding Circle: Where do WE go from here?" World Englishes 24(1), 85-94.
- Bolton, K. (2005) "Where WEs stands: approaches, issues and debate in world Englishes." World Englishes 24(1), 69-84.
- Brown, J.D. (1995) The Elements of Language Curriculum. Boston: Heinle & Heinle.
- Brown, K. (1996) "Exploring Conceptual Frameworks: Framing a World Englishes Paradigm." in World Englishes 2000, L. Smith and M. Forman, eds., Honolulu: University of Hawaii Press, East West Center.
- Cummins, J. (2000) Language, Power and Pedagogy: Bilingual Children in the Crossfire. Clevedon: Multilingual Matters
- D'Angelo, J. (2012) "Curriculum and World Englishes: Additive Language Learning (ALL) as Culture, Context and Goal. English in Southeast Asia: Features, Policy and Language in Use. Low, E.L. and A. Hashim, (eds.), Amsterdam: John Benjamins.
- D'Angelo, J. (2010a) "Japanese English? Refocusing the Discussion." Paper delivered as part of panel on 'The Possibility of Japanese English', 26<sup>th</sup> JAFEE, Kobe, July 3, 2010
- D'Angelo, J. (2010b) Editorial. Asian Englishes, 13(1), 1.
- D'Angelo, J. (2010c) "WEs-informed EIL Curriculum at Chukyo: Towards a Functional, Educated Outcome," Paper delivered at the 16<sup>th</sup> IAWEL, Simon Fraser University, Vancouver, July 26, 2010.
- D'Angelo, J. (2008a) "The 14<sup>th</sup> IAWEL-- Mapping the Exploding Multilingual Feature Pool." Asian Englishes 11(2), 94-105
- D'Angelo, J. (2008b) "The Japan Context and the Expanding Circle: A Kachruvian Response to Debbie Ho." Asian Englishes 11(2), 64-75.
- D'Angelo, J. (2005) "Educated Japanese English: expanding oral/aural core vocabulary." World Englishes 24(3), 329-350.
- D'Angelo, J. (2004) "Salikoko Mufwene in Global English: Myths and Facts." Chukyo University Journal of College of World Englishes: 6, 29-32.
- D'Angelo, J. and G. French, eds. (2004) Proceedings, First Conference on World Englishes in the Classroom, December 7<sup>th</sup> 2003, at Chukyo University, Nagoya, Japan.
- Davis, Daniel (2010) "The Inclusivity of World Englishes." Presidential Address, 15<sup>th</sup> IAWEL. World Englishes 29(1), 21-26.

- Dayag, Danilo (2009) "Philippine English and College Textbooks in Oral Communication: Exploring the link between the World Englishes Paradigm and L2 Pedagogy." Plenary Address, 15<sup>th</sup> IAWE Conference, Cebu, 10/22/09.
- Hino, N. (2007) "The Future of Japanese English- Prospects for JEIL from Pedagogical Perspectives." Paper delivered at 21<sup>st</sup> Japan Association for Asian Englishes Conference, Kyoto Koka Women's University, June 30, 2007.
- Honna, N. & Y. Takeshita (1998) "On Japan's Propensity for Native Speaker English: A Change in Sight." *Asian Englishes* 1(1), 117-137.
- Kachru, B. (2005) *Asian Englishes: Beyond the Canon*. Hong Kong, Hong Kong University Press.
- Kachru, B. (2003) "World Englishes in the Classroom: The Japanese Context" in D'Angelo and French, eds. *Proceedings: First Conference on World Englishes in the Classroom*.
- Kachru, Y. (2003) "Context, Competence and Curriculum in World Englishes." in D'Angelo, J. & G. French, eds. *Proceedings: First Conference on World Englishes in the Classroom*.
- Kawashima, T. (2009) "Current English Speaker Models in Senior High School Classrooms." *Asian Englishes Studies*, vol. 11.
- Matsuda, A. (2003) "The Ownership of English in Japanese secondary schools." *World Englishes* 22(4), pp. 483-496.
- Mufwene, S. (2008) "Comment 3" in response to Martin Schell's "Colingualism among bilinguals." *World Englishes* 27(1), 133-134.
- Mufwene, S. (2001) *The Ecology of Language Evolution*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nelson, C. (2008) "Comment 5" Response to Martin Schell's "Colingualism among bilinguals." *World Englishes* 27(1), 135-136.
- Pakir, A. (1991) "Contribution to workshop on endangered languages" International Conference on Austronesian Linguistics, Honolulu, Hawaii.
- Pennycook, A. (1994) *The Cultural Politics of English as an International Language*. London: Longman.
- Phillipson, R. (1992) *Linguistic Imperialism*. Oxford: Oxford University Press.
- Schell, M. (2008) "Colingualism among bilinguals." *World Englishes* 27(1), 117-130.
- Sharifian, F. (2008) *English as an International Language*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Smith, L. (1983) "English as an International Language: No Room for Linguistic Chauvinism." in *Readings in English as an International Language*, L. Smith ed. Oxford: Pergamon.
- Sridhar, S.N. & Kamal Sridhar (1992) *Bridging the Paradigm Gap: "Second Language Acquisition Theory and Indigenized Varieties of English."* in Kachru, B. ed. *The Other Tongue: English Across Cultures*, 2<sup>nd</sup> ed., Urbana: U. of Illinois.
- Sridhar, S.N. (2008) "World English and theories of bilingualism and second language acquisition." Focus lecture, the 14<sup>th</sup> conference of the International Association for World Englishes, City University of Hong Kong, December 4<sup>th</sup>, 2008.
- Van Horn, S. (2006) Personal Communication, Final Day of 12<sup>th</sup> IAWE Conference, October 9<sup>th</sup>, 2006.
- Van Rooy, B. (2008) "Societal and linguistic perspectives on variability." Presidential Address, the 14<sup>th</sup> conference of the International Association for World Englishes, City University of Hong

Kong, December 4<sup>th</sup>, 2008.

Yano, Y. (2001) "World Englishes in 2000 and beyond." *World Englishes* 20(2), 119-131

矢野安剛 (2004) 『外国語としての英語』から「国際語としての英語」へ英語教育再考. 早稲田大学大学院教育学研究科紀要. 第14号 179-195.

Yano, Y. (2008) "Comment 5" in response to Martin Schell's "Colingualism among bilinguals." *World Englishes* 27(1), 139-140.

訳者ノート：文中補足が必要とされる語は該当ページに注釈をつけた。学界でも日本語訳が未出の用語または原語がついている方が定義がわかりやすいものに関しては原語を残し括弧に日本語を記した。

本論文は『国際英語学部紀要』第13号（2010）所収の同名論文を翻訳再録したものである。